

## 派遣職員の力に支えられて 即戦力となったエキスパートたち



▲派遣職員のみなさんによる年度末の記念撮影。 2018（平成30）年3月23日

行政機能が壊滅状態になった私たちの町を支えてくれたのは、全国の自治体が派遣してくれた応援職員力だった。

被災から10日が経った頃、関西広域連合の兵庫県・徳島県を皮切りに、全国から自治体名のピブスを着けた緊急応援職員たちが次々と到着し、地元職員に交じって罹災証明書の発行作業などを手伝ってくれた。岩手県一関市に宿をとり、交通事情も劣悪な中、通常なら1時間もあれば通える道のりを2時間以上かけて通い続けた職員もいた。座席を取り払ったマイクロバスの車中に寝泊まりしながら仕事をした職員もいた。

5月になると、地方自治法に基づく長期にわたる職員派遣も始まった。派遣してくれた自治体は79、派遣職員数は521人、延べ746人（令和3年3月末時点）にのぼった。

応援職員たちは、被災後の厳しい生活環境を覚悟し、壊滅した町の再建という過酷な仕事に手を挙げて志願してくれた勇敢な方々である。雪が降らない地域から来た職員は慣れない雪道の運転に疲れ、聞き慣れない方言で話される電話に四苦八苦した。各地から参集した見ず知らずの職員たちが力を合わせて南三陸町の再建に尽くしてくれる情熱とやさしさ。それは地元職員にとってどんなに有り難かったことか。彼らの心意気に何度となく涙した日々だった。震災後の復旧・復興に係る膨大な仕事は、この応援職員の力がなければ到底こなすことはできなかった。

行政事務のエキスパートたちはそれぞれの出身地と南三陸町を結んだ。災害は時と場所を選ばず、突然やって来る。その時、このネットワークは共に助け合う命の糸となるに違いない。